

●弦楽四重奏曲 第12番「アメリカ」へ長調 A. ドボルザーク (1841-1904)

1891年プラハ音楽院の教授に就任したチェコの大作曲家ドボルザークは既に国際的な名声にまつまれています。そこに目をつけたのがニューヨークのナショナル音楽院の創立者のサーバー夫人、ドボルザークを同音楽院の院長として招こうとしました。ドボルザークはあまり乗り気ではなかったようですが、プラハ音楽院からの収入の25倍という巨額の報酬に引かれ(6人の子持ちだったこともあり)受諾し、1892年アメリカに渡りました。そこで聞いた黒人の民謡やネイティブアメリカンの音楽語法に大きな印象を受けて交響曲第9番「新世界より」を1893年に書き上げ、同じ年の夏休みを過ごすために訪れたボヘミアからの移住民が多く住む町で非常な短期間でこの弦楽四重奏曲第12番「アメリカ」を完成させてしまいました。5音音階に基づいた民謡風の旋律や黒人霊歌風の歌なども登場し、親しみやすい曲になっています。なお「新世界より」は作曲者自身による命名ですが、「アメリカ」はそうではありません。

第1楽章 少し速めの4拍子

第2楽章 かなりゆったりとした3拍子

第3楽章 速い3拍子のスケルツォ

第4楽章 大変速い2拍子

演奏時間 約25分

●弦楽四重奏曲 第2番 B. マルティヌー (1890-1959)

ボフスラフ・マルティヌー (Bohuslav Martinu) はドボルザークと同じくチェコの作曲家です。日本での知名度は低いですが、同時代のバルトークやプロコフィエフと並ぶ大作曲家であると位置づけている研究者もいます。1923年からはパリでルーセルなどについて学んでいましたが、1941年ナチスの迫害を避けるためにアメリカに渡りました。アメリカでは全6曲の交響曲の内5曲を完成させるなど、最も充実した作曲活動を行っていました。1953年にヨーロッパに戻りましたが、複雑な事情によって祖国チェコに帰ることはありませんでした。弦楽四重奏曲は7曲残しています。1919年に作曲された第1番はラベル風なものでしたが、今回演奏される第2番は1925年パリで学んでいた時代の作品で個性が発揮され始めています。

この曲が作曲された1925年前後に発表された他の作曲家の作品には次のようなものがあります。

ストラビンスキー プルチネラ組曲 (1920)

プロコフィエフ ピアノ協奏曲第3番 (1921)

ショスタコービッチ 交響曲第1番 (1925)

シェーンベルク 管弦楽のための変奏曲 (1928)

これらの作品は音楽史上では“近代音楽”であり、まだ訳のわからない“現代音楽”にはなっていません。マルティヌーのこの曲も同じような意味で聴きやすい音楽です。特に第1、3楽章の躍動感のあるリズムは聞き物です。

第1楽章 ゆっくりした序奏の後に激しいリズムの速い部分が続きます

第2楽章 ゆっくりとした重い感じの曲です

第3楽章 急速なスケルツァ風の曲です

演奏時間 約20分

—休憩—

●弦楽四重奏曲 第13番 ト長調 A. ドボルザーク (1841-1904)

上述のように1892年からニューヨークのナショナル音楽院の院長として活動していたドボルザークですが、望郷の念は増すばかり。また音楽院の経営状態の悪化で報酬の支払いも滞りがちであったため、1895年2月にチェロ協奏曲を完成させるとサーバー夫人に辞意を伝え、4月にはアメリカを離れてチェコに戻りました。帰国後半年の休養の後、11月にプラハ音楽院に復帰するとともに作曲活動を再開し、12月にはこの弦楽四重奏曲第13番を完成させています。祖国に戻った喜びが美しく表現されており、第12番「アメリカ」に比べて知名度は低いですが、曲の内容は充実していて、特に第2楽章の変奏曲は「ドボルザークの手になった最も愛らしく、深みのある緩徐楽章」と評されています。この曲の後、アメリカ時代から手を付けていたもう1曲の弦楽四重奏曲（第14番）を完成させたドボルザークは以後室内楽、絶対音楽の分野からは手を引き、交響詩、オペラの作曲に心を注ぐようになりました。この時代の作品表には残念ながら私たちになじみのない曲名がたくさん並んでいます。

第1楽章 少し速めの2拍子

第2楽章 かなり遅い3拍子。変奏曲です

第3楽章 大変速い3拍子のスケルツォ

第4楽章 短いゆっくりした序奏の後に速い2拍子

演奏時間 約38分